

「ぼー様、参上！」

朝からどうにもお腹の調子が悪く、トイレとお友達になっていた私。
ドアの向こうでは、ただならぬ気配を察知した三匹の猫たちが、まるで「事件は現場で起きている」と言わんばかりにざわついていた。

机に突っ伏した私を、ビオラちゃんが心配そうにのぞきこむ。
「お母さん、大丈夫？」
その目はまるで小さなお地蔵さま。

アビイちゃんはといえば、なぜか遠巻きに眺めている。
「ぼく、こういうとき近づいたらダメなやつだよな？」と、
妙に賢者ぶった距離感。さすが薬師如来（仮）。

そして私は、力尽きてカーペットにころん。
そのままうとうと…していると。

ふわり、と。
あたたかい毛のぬくもりが私の腕に重なった。

——え？まさか！？

そこにいたのは、なんと我が家の“殿”ことぼーちゃん。
普段は一人を愛し、他者とベタベタするのを嫌う孤高のスコティッシュ。
弟妹たちに甘えん坊の役を譲り、自らは大日如来のようにただ静かに鎮座する猫。

そのぼーちゃんが。

「どうしたの？」と言わんばかりに、私のそばにやってきてくれたのだ。

灰色の背を私の背にもたれかけて。
「心配だから、ここにいろよ」とでも言うかのように。

——聖域降臨。

アビイとビオラも、ぼーちゃんのその神々しい行為に息をのんだのか、
一歩も近づかない。
空気を読んだのか、ただ驚いたのかはわからないけれど、
その場はぼーちゃんと私だけの世界になった。

ぽーちゃんの白い足の上に手をおいて、
しばし眠り、目を覚ましたときには、不思議と身体が軽くなっていた。

ぽーちゃん、ありがとう。
今日は特別に「ぽー様」と呼びながら、おやつも大盛りサービス。

……やっぱり猫って、すごい。
どんな薬より効くことがあるのだから。